

もくじ 沖縄戦を学童疎開地で聞いた渡名喜先生 1P まちの写真館3 千柳館のあゆみと千住の思い出③ 2P 鹿浜での子どもの生活⑫ 3P



梅島第二小学校集団疎開記念写真 昭和20年8月25日撮影



添付されていた紙 (記念写真の人物配置図)

その明氏の父が沖縄生まれの元尊(げんそん)氏です。元尊氏は梅島小学校勤務だと思いましたが、間違ったので、何かの間違いかとも思いますが、梅島二小にも問い合わせましたが不明でした。

梅島二小の三〇周年誌を調べると創立の昭和一九年と二〇年に元尊氏が同校に勤務したとありまし

沖縄戦を学童疎開地で聞いた渡名喜先生 矢沢 幸一朗

足立史談

第570号

2015年8月15日

足立区教育委員会 足立史談編集局 足立区立郷土博物館内 〒120-0001 東京都足立区大谷田5-20-1 TEL 03-3620-9393 FAX 03-5697-6562 (27-308)

一月に開催された学童疎開資料展の際に何枚かの写真が新に提供されました。

その内の一枚は三輪和子さん提した。梅島第二小、撮影日時場所と全員の名前が記されたものでした。ここに「集団疎開記念撮影 昭和二十年八月二十五日 長野県下高井郡延徳村 光岸寺学寮」とあり、三十二人の名前を記した紙が添付されていました。その中に「渡名喜先生」という名前がありました。



明王院時代の渡名喜元尊ご夫妻と明氏

「父親(元尊氏)の写真であり、名前等の記入も父の字である。」とご連絡をいただきました。あわせて、「一教師の回想」と題する冊子もいただきました。昭和五六年九月に急逝されたとのこと、ミサ夫人が後日作成した小冊子です。そこには、「昭和一三年・梅島小学校勤務、昭和一九年六月・梅島第二小学校勤務、二一年一月依願免本官」と履歴書の写しが紹介されていました。

足立史談会の元役員のご遺族の故郷田良雄氏に、「渡名喜先生のことは知っていますよ。空襲で住まいを焼かれ困っていたので、明王院の部屋を借りられるようにお世話をしたことがありますよ。」ということを知りました。

元尊氏の履歴書には疎開の事は書かれていませんが、回想文の中に「学童疎開引率の思い出」と題した短い一節があります。

戦前の昭和十三年、私は野心を起こして東京に飛び出した。足立区の梅島尋常小学校に勤め、昭和十九年六月一日同校の分教場が独立して梅島第二国民学校となったのでそこへ転動した。その頃から東京にも敵機が出没するようになり、学童疎開が始まった。私も四十余名の学童の引率主任として長野県へ赴くことになった。疎開先は下高井郡(新潟県に近い)湯田中温泉の遊郭跡で、割に静かな保養地であった。

寒さと食糧不足になやまされたが、それ以上に困ったのは虱の大群だった。何時でも、どこでも自由に使える自然風呂につかり、身体も衣類も清潔にしたが、虱の数も衣類も清潔にしたが、虱の数はふえる一方である。思い余って衣服一切を熱湯や雪の中に三昼夜もつけたり、うめても見たが一向に死滅しない。後で聞いたところ全国的な傾向であったとのこと、『戦争とシラミとは何か因縁があるのでは・・・』と今もって不思議でならない。

この後、「私の人生体験」として、戦争敗北、沖縄玉砕の報は長野県の疎開先で知り、十月には東京に引き揚げたが、一月は焼野原と化し、学校も焼失したので、焼け残りの梅島国民学校の一部を借りて授業を再開したが、毎日米兵が

来て教室の中に入って机間巡視をしたり、後に立って授業の様子を見たりして面白くなく、敗戦国のみじめさをつくづく痛感した。・・・

この後に、沖縄県に帰らねばならなくなつた事情を述べ、やはり教職についた元尊氏は、昭和二三年に校長となり、四四年まで勤め、同年請われて佐敷村長に就任した。履歴書を見ると、三三年までは給料月額が「円」で記載されているが、三五年から四六年まで給料月額が「ドル」となっている。これも沖縄県民の歩んだ歴史の一端であろう。

学童疎開の話がなくなつてしまった。本紙四五二号も参照していただければ幸いである。

沖縄県出身の教師が沖縄戦とは別のところ、学童疎開の引率で八月一日を迎えました。疎開地で聞いた沖縄戦の報道に心ここにあらずの思いもしたでしょう。

(足立史談会)

まちの写真館3 千柳館

千柳館のあゆみと千住の思い出3

柳下 静子

■千柳館のたたずまい 大正十一年、博は父の死後、修業先より戻り「千柳館」を継いだのは二十一歳。自身

の妹弟はまだ独立しておらず直後に結婚。次々と子供も増え、いつも二人位修業中の若い人を抱えた大世帯だった。それでも父、叔父の築いた地盤があり、大正、昭和と時代は進み、まちの写真館が最も重宝がられ大切にされたよき時代だったのだろう。

千住界隈の旧家、大家から事あるごとにお呼びがありその出張撮影を、当時は「出(で)うつし」とよび、「先生」は「弟子」を連れて出掛けるのが当たり前だった。また婚禮の写真はまちの写真店に向いて写した時代であり、それ程戦争の影が身近に迫つてなかつた時期だった頃だろう。七五三の当日は朝から着飾つた親子連れが外まで並んでいた情景もうつすらと目に浮ぶ。

千住仲町六十一番地の「千柳館」は、たぶん借家の仕舞屋二軒分を繋げて増築改築を重ねたと思われる横長の建物。「写場(しゃじょう)」と呼んでいたスタジオが横に長く伸び、一部明かり取りのガラス張りの天井、クラシックな等身大の鏡のある待合室には大正モダンイズム風の椅子、テーブル、広々とした両開き扉の玄関の三和土(たたき)はタイル張り、すぐ左手の壁には取り付け式の電話、外側は木造でうすみどりの色のペンキで塗られ、当時町の医院や写真店などによく見られる西洋館風に改築されていた。

■父の修行時代と千柳館 博は、祖父邦三のシベリアにまで渡つて開業資金を入手した進取の気質はあまり受け継がなかったのだと思う。千寿小学校、旧制府立中学を中退し、大正四(一九一五)年、野島康三が日本橋人形町に開設した「三笠写真館」に入門する。十四歳。野島は写友であり人格者でもあった山崎静村に営業と門下生の育成を任せ、自身は梅原龍三郎らに画業を学び、専ら新しい独自の写真を追及し、一時期画廊も開き、後に名を成す芸術家のパトロンとしての役割も果たす。長い洗髪を胸元に下げた「裸胸婦」(昭和五・一九三〇年)はよく知られている。

その後、大正九年には、野島はさらに九段坂下にあった当時人目を引いた赤レンガ造りの豪華な洋風建物を手入れし、「野々宮写真館」と命名した。「三笠写真館」から従業員も加わり東京で最も名の知れた写真館だったという。

「三笠写真館」時代のものだろう、山崎先生と思われる温和な風貌の人物を囲み、上等の服装の年かさの技師三人、着物姿の若い三人の弟子。その弟子の中でも最も年下と見え、まだ少年の面影の残る博が、かすり柄の筒袖姿、後の方ではに自分で写っている。この写真は、百年は経っているのに変色もなく、大震災、戦



(右より女兒を抱いた人の後ろが博)

災をくぐり抜けいまでも残っている。野島先生が盛んに勧めたという弟子同志互いにモデルになって撮った肖像写真も数枚残っている(右下)。ちなみに野島は自分を「先生」と呼ぶことを嫌ったという(『野島康三遺作集』)。博たちは技師長の山崎静村を「先生」と呼んだそうだ。

博の青春時代は、大正リベラリズムと謳った時代である。三笠、野々宮写真館で過ごした環境のせいもあつたと思うが、よく昔を懐かしみ、日本人として初めて海外でオペラを披露したという三浦環の歌声や、海外からの来日はまだ珍しかった時代、メニューヒンのバイオリンの音色に感動した話、グリーグのペール

ギユント組曲の物語を知っていたことも不思議だった。

明治生まれながら自己流「自由主義者」とでも言うのだろうか、何か深刻な時に限っておかしいこと、おもしろいことを言っておかしく笑わせ和ませるのも得意とし、またよく自分を「貧乏大尽」といって悦に入っていた。お金にガツガツするのを嫌い、どちらかと言えば、カネはキタナイ派だったと思う。そのせいかよき時代の写真館の「先生」だった頃はそれでも通用したが、あの戦争で多くを失った後、かつてのような写真館の復活は難しかったのだろうし、時代も変化していたのだろう。

それでも戦後は昔からの変らぬ得意先からは大切にされ、創立から地元の潤徳学園の写真全般を引き受けていた。片腕だった末娘がやがて中心となったが七十歳を少し過ぎるまで現役であり、写真は「食べるため」というよりは「生涯のよき趣味」という姿勢で生きたのではないかと今も懐かしい。



■セピア色の記憶 感光を防ぐための赤い電球が点り、酢酸臭いむっとした暗室。かくれんぼうにはうつつの巻き上げ式自在の背景の裏の暗がり。

黒くどっしりした大型移動式写真機アンソニーの蛇腹がググーツと伸び、黒の被り布の奥を背伸びして覗かせてもらったら被写体が逆さまだったときの驚き等々……。

それらはマグネシウムをたいいたフラッシュの一瞬の閃光に浮び上がってすぐに消え、私の「千柳館」はセピア色に霞んでいった。



父と私

(やぎしたしげこ・国立市在住)

—終

縁故疎開ですごした北鹿浜町の思い出 30
鹿浜での子ども生活 12

小川 誠一郎

■買出しが来る 昭和一九年夏の終わり頃から、鹿浜へ食糧の買い出しが大牽押し寄せ、農家の庭先は八百屋に早変わり、収穫した野菜は残らず売れ繁盛した。

叔父の出征で豊島市場まで農産品を持ち込めぬ実家は、この直接販売に頼るほかなかった。お金で買えるものが少なくなるご時勢で、取引はなかば物々交換の場でもあった。顔なじみになったお母さん達は、お札にと着物地や立派な飾り物、はては書籍類まで手にして現れた。

本と云えば、叔父や叔母の富山房の中学教科書があつたので、口絵や挿絵を眺め楽しむことができたが、縁側に積まれた、おみやげの本はとも気になった。中でも美しい色表紙の尾崎士郎作「人生劇場」全巻揃いが印象的だった。やがて引き取り先が見つかったのだろう、見えなくなった。でも講談本の「南総里見八犬伝」は、彦造ばりの挿絵(註)がすばらしく、漢字がルビ入りなので、これだけは愛読書となり手元に残された。

とある昼下がり、皆が野らへ出て一人でいると「そのカボチャわけ

てくれませんか？」と門先から細かい声。「ほくひとりだから分かんない！」と、疲れた様子のおばさんの前に、目を伏せていた。互いに運のない巡り合わせとなった。下町の夜間の空襲が激しくなるにつれ、買出し客の足が徐々に遠のいて行った。

■レコード 叔母達が買い集めた昭和一〇年代の流行り歌のレコードがあり、古い蓄音機が二台、一つは始終手回しが必要だった。戦時下レコードの鉄針の製造が止り、代用の竹針が市販されていた。これは音が小さく、レコード一枚が限度。鉄針でも普通二、三枚で使い捨てだが、貴重なので、すり減った先をコンクリ床で磨いで何度も再使用した。ほどこなく新宿からコロムビアの蓄音機が疎開してきた。これには中山新平の童謡が一枚だけ付いてきた。レコードは一人いる時の楽しみとなり、東海林太郎、藤山一郎、霧島昇、岡晴夫、李香蘭、二葉あき子などを繰り返し聴くうちに、昭和初期の日本の旋律が体へ刷り込まれて行った。

■戦後の演芸会 戦時態勢下、流行り歌の多くは公開の場での演奏が禁止され、ラジオからは戦意高揚の軍歌調の歌ばかりが流れた。終戦でそれが逆転し、今までのうっ憤を晴らすかのように、賑やかに楽しむ風が巻き起こった。近郊の集落で競うように夏・秋祭りに合わせた演芸大会



祖母の実家の門口（家の敷地内、母屋からの眺め）
湧き水をたたえた洗い場池が敷地内にあり、ネズミモチの生垣が囲い、大きな猫柳の古木が、道路沿いのくずれかけた岸边を固めるように生えていた。

が、急ごしらえの仮設舞台で開かれた。鹿浜・糺屋では、若い男女の歌手を呼んで歌謡大会が開かれた。歌手とアコーディオン奏者がステージに乗り、広場に大勢の立ち見客が詰めかけた。沢山の百ワット電球に照らし出された、女性歌手の華やかな衣装とスパンコールの煌めきがまぶしく、拡声機の大声に体が震えた。

レコードで聴き慣れた曲はあまりなく不満だったが、大勢の熱気の中に体をあずけていた。そろそろ皆が帰る頃には、夜もだいぶ更け大きな月が中天に掛かっていた。弟の手を引き、妹を背負う、一家総出のめづらしい夜間の遠出となった。

■夏祭りへの参加 昭和二十一年の春半ば、新宿の焼け後に家が建

ち、家族が戻って行った。三年生だけ椿で過ごしたいと希望し、独り残った鹿浜の夏休み、加賀皿沼で祭りがあって、皆と一緒に祖母の実家の高橋家を初めて訪れた。皿沼は鹿浜より家屋敷が混みあっているようだった。演芸の前に、恥ずかしくも、当地の子供達に交じって山車を曳いた。高橋家では、祖母の二人の姪が娘盛り、晴れやかな演芸舞台へ妹のスマちゃんが颯爽と登場、三度笠のやくざ姿も凛々しく、道中もの演歌踊りを艶やかに披露し若衆を沸かせた。親戚筋の面差しに魅せられ、お姉さんへのほのかなあこがれのような、萌えを子供心に意識するのだった。おりしも北関東の盆踊り歌、八木節が大人気、各地を巡回する本場の歌舞団がトリで出る演！酒樽を叩いてつくる硬質の激しいリズムにのり笛や鉦が競い合い、本調子の美声と大勢の踊り手の花笠が舞ってステージを締めくくった。

夏には、待望久しい盆踊りが島水川神社で催された。裸電球がまぶしい境内は、どこから湧き起ったのだろう、ゆかた姿が涼しい老若男女の明るい笑顔で埋めつくされた。まずは昭和初期の「東京音頭」が夏祭

りの記憶を呼び覚ました。戦後作曲された新しい「青空音頭」や「平和音頭」がつづいて登場、新時代の幕開けを告げるかのように、電蓄（電気蓄音機）の大音響が鹿浜の平和な夕空に響き渡った。ふと気付くと、優しいスイちゃんが、大樹の陰から微笑みかけてくる。やぐら太鼓の強い振動に身を震わせながら、学校へ通っているのかな、などと思いやった。

*伊藤彦造：明治・大正期に活躍した挿画家。美貌の剣士の冒険劇の挿絵で人気。「少年俱樂部」や「キング」などに掲載された。（慶応大学名誉教授）

収蔵資料展

地口絵紙コレクション

—言葉遊びと笑いの精神—

会期：七月二二日～九月二七日

地口絵紙とは、江戸時代の言葉遊びを行灯にしたたてたものです。江戸の笑いにつつまれてみませんか？



ひっくりかえる